

町民が生んだ只見の宝「民具」②

民具収集のはじまり (その1)

民具の収集を始めた昭和四十年ごろの只見町の状況を簡単に振り返ってみます。

昭和三十四年八月、旧三か村の合併が成り、新生只見町が発足しました。翌三十五年には田子倉ダムが完成、さらに大鳥ダム・滝ダムが着工され、電源開発ブームが続きます。そこに高度経済成長の波が急速に押し寄せてきて、只見町は、ほかの山村地域より一足早く、社会の諸相を大きく変ぼうさせようとしていました。

電化製品の導入、農業の機械化、農家住宅の改築が進み、生活様式や生産様式の変化にはめざましいものがありました。それによって古いものは不要とされ、骨董価値のあるものは古物商が買いあさり、無用となった民具などは焼却されたり、山野に捨てられるのが散見されました。

このように失われつつあった民具を組織的に収集するようになつたきっかけは、只見・朝日・明和地

区にあった三つの公民館と教育委員会で構成する社会教育連絡会の活動からでした。

当時、只見・朝日・明和の各公民館には、非常勤の館長と常勤の主事がいいて、共通する事業として「只見町公民館報」を発行し、講演会や講座などを分担して開き、その連携を図るために毎月定例会を開いていました。この中で、民具の保存対策は、たびたび話題となっていました。そして、それを進める契機となったのは、『民俗資料収集の手引き』という一冊の本との出会いでした。

昭和四十年、成法寺観音堂の復元工事が着工となり、その実施市町村を対象にした文部省主催の文化財指導者研修会が東京で行われたときのことです。担当者だった筆者が参加し、講義のなかで使われたのが、その本でした。内容が只見町の直面している民具の現状をよく示唆しているものだったので、その場で一〇部注文して帰りました。これは社会教育連絡会に報告され、緊急の課題として「すぐにやろう」と動き出したのです。

「只見町公民館報」の四十年十二月号に次のような記事を載せています。

『生活文化財を保存しよう』

最近の生活様式の変化、生産様式の変化はめざましいものがあり、古いものは急激に失われつつあります。(中略)捨てる前に公民館に一報頂ければ、保存処置を講じます。(略)農具や生活用品などの主な品名を例示して町民に呼びかけました。これが只見町における民具収集のはじまりとなります。

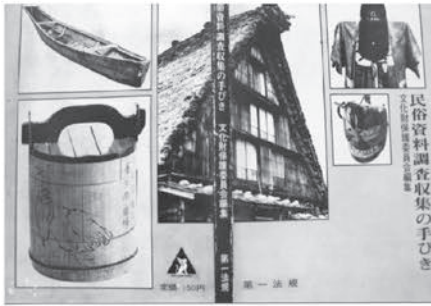
翌四十一年度の町社会教育委員会の目標には、「民俗資料の発見と保存」の項目が新たに設けられ、事業として「民俗資料調査」をすることを掲げまし



▲民具の收藏庫として使われた電発診療所（只見字町下）

た。民具の収集は、公民館事業として全町的かつ本格的に行われることになったのです。(只見町公民館報「四十一年六月号」)。

さらに、民具の収集には、かなり広い収蔵場所が必要となります。そこで目をつけたのが旧電発診療所の空施設でした。只見字町下の町民野球場付近にあった電発診療所が閉鎖されたばかりで、収蔵場所として提供してもらったことになったのです。当初三地区で集めた民具は、スクールバスで運び込み、ここにすべてを収容することができました。民具の収集活動は、ようやく順調に進むようになったのです。



▲民具収集のきっかけとなった本「民俗資料収集の手引き」